
満席のレストラン

之ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満席のレストラン

【Nコード】

N6704V

【作者名】

之ち

【あらすじ】

出張先であるレストランに入る。

全席空席のはずが支配人は満席だという。

だが、私は腹が減っていた。たまらなく腹が減っていた。

まだ初夏の頃。私はある田舎まで出張を命じられた。

その田舎というのまた秘境のような場所で取引先の会社があつても行きたくは無かつた。しかし、だ。どんなところであつても足を運ばなくてはならないのも事実。私は一人、東京を離れ一泊二日の旅に出た。

電車を乗り継ぎバスに乗りやってきたのはどうみても人のいなさそうな山だった。ふもとはいくつか店や民家が建ち並んでいたがどうも歩いている人はいないようだった。

渡された地図によるとこれから向かう取引先の会社は山の奥にあるようだ。私は行くだけでも大変な思いをした。きつと移動する時間のほうが何倍も長い。

長い坂道を登りようやく取引先につく。すでに体力は削り取られていた。

助かつたのは相手先の社員達がとても良い人たちだったことだろう。誰もが気さくで笑顔でいた。私はすぐにいくつかの案件に判を押し無事に仕事を終えた。終わってみればたいした事はない。

こんなことならもつと若い社員に任せればいいのにと思った。

とくに問題も起きず仕事を終えると私は腹の空き具合に一気に力をなくした。ふもとへと降りるなか緊張から解けたせいもあつてか腹の鳴る音が下る坂道ですつと聞こえていた。やってくるときは登りという事もあつて時間が掛かったが帰りは楽だった。

滑らないようにして降りるのはよかつたがただ一つ、腹が減つて堪らなかつた。

こんなことなら送ってもらえばよかつた、と振り返つてさっきまでいた社屋を見るがさすがに今からでは言いにくい。手を煩わせるのも気が引ける。

山道を下っていくなかで外灯が灯りだす。山の緑とオレンジの光が混ざるととても綺麗に見えた。もう夕方近くになっている。そういえば昼飯も食べていなかった。

麓まで行けば料理屋の一件や二件あるものだ。そこまで我慢すればいいだろうと私は歩く。

麓につくとやはり、というか当然のように一軒のレストランが見えた。山に登る前、こんな店があったか憶えていなかったが今は目の前にはつきりと聳え立つ。

純和風の町並みに馴染めていない洋館風の建物の周りには柵があり入り口には薔薇のような花がまきついている。なんて美しいのか。こんな田舎には不釣り合いだと思いつつも私も中へと入った。

レストランの扉はカランカランと客の来店を告げるベルのようなものが仕掛けられていた。私が扉を開くと鳴った。

すぐ横にはカウンターがあり、茶色の床と白い壁が広がっている。外だけでなく中も立派な出で立ちでどこまでも美しく整理されていた。私はテーブルの群れの真中に聳える白い薔薇に目を奪われた。

テーブルの数も多くきつと繁盛しているのだろうと思う。

だが、肝心の客がいなかった。

それに従業員らしき人物もいない。

扉の音で解るだろうと思ってしばらく待ってみる。

入り口には確かにOPENと書かれていた。間違いなく営業中のはずだ。

待って三分。私はさすがに腹が減ってこれ以上は無理だとなった。「誰かいないのか!」

少し、自分でも大きすぎたかと後悔した。

そんな後悔を吹き飛ばすのは店の奥からでてきた若そうな従業員だった。

「はいはい、どちらさまで?」

「どちらさま？ この店は予約しなくちゃいけないのかな？」

「いえ、そんなことはありませんが本日は満席となっております」

「はあ？」

満席という言葉にはあまりにも足りない。テーブルには誰もいないのだ。

「これからここを埋める団体でも来るのか？」

「団体様ではありませんね。でもそうかもしれません」

このとき、私は腹の減りが異常だったのだ。正常な判断ができなかった。

「どうかしたのかね？」

「支配人」

私と同じくらいの歳の男がやってきた。すこしふっくらとした腹をしていた。

「この方は？」

「はい。予約のないお客様なのですが本日は……満席です」

「この者の言うとおり本日は予約がいっぱいでね。また日を改めて来てくれませんか？」

「そんな！ 私は腹が減ってたまらないんだ、お茶漬けでもなんでもいいから食べさせてくれないか？ すぐに出て行くよ」

本当に何でもよかった。腹の足しになるものなら。胃袋に放り込むだけで満足するのだ。だというのに二人の男はぶつぶつと耳元で囁くような話をする。

「なあ、頼むよ」

私の願いが届いたのか二人は話を止めた。

「では、お茶漬けでよろしいですか？ すぐにご用意できますが」

「お茶漬け？」

「嫌なら……」

「いや、それでいい！ お茶漬けが食べたかったんだ」
断ることなどできなかつた。

「では、こちらへ」

案内されたのは並ぶテーブルの中心にある花の飾ったテーブルだった。私が気を惹かれた場所ではあったがとても客席とは思えない。白い花が目の前に飾られている。

「ここで？」

「不満でも？ 他のテーブルはお客様が決まっておりますのでここしかありません」

随分、強い物言いだったが逆らえなかった。

「わかった。ここでいいよ」

案内した男も奥へと行ってしまった。

また一人きりになってしまった。

注文はお茶漬だけだ。いくらわがままでいっても支払う料金も時間もそんなに掛からない。と、苛立ちながら待っていると奥へ引込んだ男がやってきた。

私の分かと思いきや男の持っているものは銀皿にパスタらしきものが乗っていた。客はといえば誰もいない。なにをしているんだ、と聞いてみようかと考えたがもうすぐ客が来るのかと思ひ声はかけなかった。

次に奥の扉が開くと支配人自らお茶と椀に盛られたご飯を持ってきた。明太子やら海苔やらがのつていた。

「これからお客様がこられます。できるだけ騒がないようにしていただけますか？」

「出してくれればいいんだ。食ったら帰るよ」

「御代はけっこうですのでそうしてください」

そんなに出て行ってほしいのかと思つたがどこか支配人の顔がそうではないように見えた。なにやら青ざめていた。

「わ、わかった」

文句をいうのはやめておこうと私は納得した。

きつと予約客が一気に押し寄せてくるのだろう。見れば男が止まることなく必死に料理を運んでいる。誰もいないのにテーブルには豪華な料理が並んでいる。

どの料理もシヤレていて私のお茶漬けが浮いていたが腹が満たされて機嫌が直つていく。最後の茶をすすると私は辺りを見渡した。配膳に必死だった男はいつのまにかいなくなっていた。どのテーブルにも料理は並べられていたが人の姿はない。

いつくるのか？

そもそも客より前に料理を並べていいのか……

と、疑問に思いながらも私は席を立つた。

椅子が音を立てたとき、支配人がささつと駆けて来た。

支配人の顔はよほど疲れているのか青ざめていた。

「なにがあつても気づいていないふりをしてください。あなたが騒ぐと大変なことになります」

なにやら意味不明なことを言われた。しかし彼の顔が真剣であったため私は何も言わず入り口へと向かつていく。テーブルに用意された料理の数々は喉が出るほど美味しそうだった。一口でも口にしたいと思うも私を見る支配人がそうはさせなかった。

仕方なく入り口を目指す。

ちょうどカウンターの隣りで「ううあ……」という妙な声があった。なんと言つたらいいのか。呻き声ようでもあり、あまりの感動に喉が震えたようでもあった。声に向かつて振り返るといつの間にか私のいた中央から右の席に一人客がいた。いつのまに入ってきたのか……

気づかなかつた。客はスーツ姿の四十代。テーブルの Pasta を目の前にして動いていなかった。

「ごゆっくりお引取りください」

支配人がそう言うのと店内はどんとざわつく。彼の顔色が私に移つたように私もいつのまにか青ざめていた。店内は冷たく足が震えていた。

この店は大変だ……

もつと早く気づくべきだった。おそらく外からこの店を見たとき気づくべきだった。私はこの状況から解放されたい一心で扉を開いた。

まるで朝の日差しにも似た光に包まれたように私は光のなかに向かつて進む。

私は道に出るとタクシーを捕まえる。

しばらく走って私は運転手にさっきの話をした。

「はあ？ お客さん何言ってるんですか？ あんな所に店なんてあるわけ無いでしょ。酔ってるんじゃないですか？」

残念ながら私は酒など一滴も口にしていない。

翌日、東京に帰る道の中でレストランのある場所を通る。

運転手の言うとおりレストランのあった場所はなかった。

いや、レストランはあった。

あの洋館だ。

洋館だけはあった。レストランの看板はなく窓は割れ壁は汚れきっていた。営業中とは絶対に違う。

なら、昨日の彼らは誰だったのか……

あの運ばれた料理はいつたい誰のものであったのか。あの料理を前にしていた男は誰なのか。私は考えたくもないことを頭の隅に抱えて東京へと帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704v/>

満席のレストラン

2011年8月11日03時30分発行